

ドレフュス事件は終わらない ——「反ユダヤ主義 antisémitisme」という名の亡霊

The Dreyfus Affair and ghosts of antisemitism

福田美雪

Miyuki FUKUDA

ドレフュス事件のエピローグ

ここにひとつのイメージがある。1898年2月14日の『フィガロ』紙に掲載された、人気風刺画家カラン・ダッシュュによる、《家族の夕食》と題されたイラストだ〔図1〕。1コマ目では親族一同が集う和やかな食卓で、家長が「絶対に！ ドレフュス事件については話さずにおこう！」（——*Surtout! ne parlons pas de l'affaire Dreyfus!*）と言う。2コマ目では、「…彼らは話してしまった…」（…*Ils en ont parlé...*）と、全員が取っ組みあいの喧嘩を始めて減茶苦茶になった食卓が描かれる。1コマ目は、第三共和制最大のスキャンダル「ドレフュス事件」の話題がタブー視されたこと、そして2コマ目の情景は、事件がもたらした社会的分断、すなわち「ドレフュス派」（dreyfusards）と「反ドレフュス派」（antidreyfusards）の論争が、家族の絆さえ断ち切るほど深刻なものとなったことを示唆している¹。

しかし、なぜこのような冤罪が生まれ、軍部、政治、司法を巻き込んで国内外を揺るがす大事件となったのか、なぜ今も多方面から研究されるほど複雑怪奇な様相を呈したのかを理



〔図1〕 カラン・ダッシュュ画《家族の夕食》
(1898)

¹ 実際には、このカリカチュアのようにドレフュス事件をめぐる諍いが家族の断絶に至ることは少なく、多くの市民は軍部に対する信頼から、あるいは事なかれ主義から、積極的な関心を示さなかったという。

解するのは容易いことではない。19世紀後半のフランスは、新聞発行数が激増したジャーナリズムの時代であり、当時のメディアがある時期から一斉に報じたドレフュス事件は、第三共和制下の社会が内包する諸々のゆがみや亀裂を照らし出した。しかしこれは、単なる共和主義と愛国主義、左派と右派とのイデオロギー的な闘争にはとどまらなかった。膨大な情報が瞬時にメディアで共有され拡散する現代においても、「話さずにおこう!」という話題を「ドレフュス事件」に代わるさまざまな時事問題に置き換えれば、一見シンプルなカラン・ダッシュのイラストは、驚くほどのアクチュアリティを保っている。そのこと自体、ドレフュス事件がいかに「時代を映す鏡」であり、現代社会の諸問題と接続する事象であるかを物語るのだ。そこで本稿では、事件の歴史的背景を解きほぐしながら、19世紀末のメディアに氾濫した「反ユダヤ主義 antisémitisme」という言葉を手がかりに、とくに自然主義作家ゾラが果たした役割とその影響について再考してみたい。

1. 「ドレフュス事件」が起こるまで

1. 1) 21世紀にふたたび脚光を浴びる事件

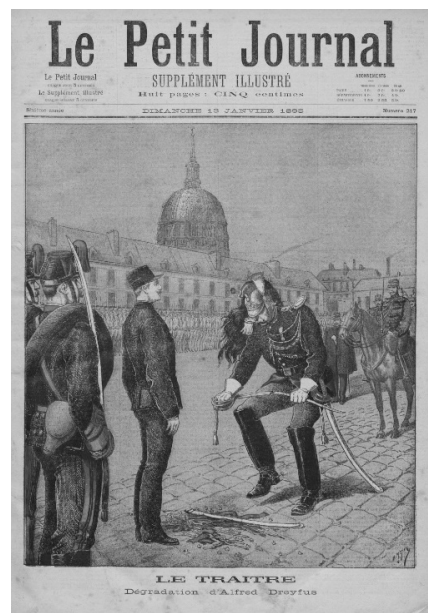
法的な意味でのドレフュス事件は、1894年12月の陸軍非公開裁判で下された、アルフレッド・ドレフュスに対する有罪判決に始まる。そして12年後の1906年、破棄院(Cours de Cassation)の判決において、ようやく正式にドレフュスの冤罪が晴らされた。1894年のドレフュス逮捕から、1898年のゾラ「私は告発する J'accuse...!」の発表、1906年のドレフュス名誉回復までの一連のできごとをもとに、勧善懲悪のストーリーを描くのはたやすい。いっぽうに正義と真実を愛する「ドレフュス派」、他方に不都合な事実を目をつぶりユダヤ人排斥を叫ぶ「反ドレフュス派」を置けばよいのだ。たとえば、1937年に公開された伝記映画『エミール・ゾラの生涯』(*The Life of Emile Zola*)は、「私は告発する」の発表によって迫害されるゾラをヒロイックに描き、アカデミー賞作品賞を獲得した。しかし現実には、ドレフュス事件は今日もなお、陰謀論を含めたさまざまな解釈を呼び、ヨーロッパで反ユダヤ主義が高まるたびに必ず参照される事象である。

ここ半世紀で、ドレフュス事件が再び脚光を浴びるきっかけは幾度もあった。まずは、事件を題材にした一連の書籍や映像作品の発表である。とくに、8年をかけて事件を再調査した歴史学者ジャン＝ドゥニ・ブルダンの『事件』(*L’Affaire*, 1983)はベストセラーとなり、1995年にはイヴ・ボワセ監督によるTVドラマも放映されて反響を呼んだ²。さらに2018年には、ロバート・ハリスの小説を元にしたロマン・ポランスキー監督の『オフィサー・アン

² Cf. Jean-Denis Bredin, *L’Affaire*, Paris, Julliard, 1983.

ド・スパイ』(原題 *J'accuse*) が公開された。監督自身も幼少期に『エミール・ゾラの生涯』に強い影響を受け、ホロコーストを生き延びている。事件の鍵を握るジョルジュ・ピカール中佐の視点から、ドレフュスをスケープゴートに仕立てた軍部と共和制の矛盾を炙り出した本作は、翌年のセザール賞において監督賞を含む主要三部門を受賞した。そして2023年9月からは、映像作家ジョルジュ・メリエス³とエミール・ゾラの共闘を題材にした舞台、『向こう見ずな者たち』(*Les Téméraires*) がコメディ・バステュー劇場で上演されている。この間には、歴史学者フィリップ・オリオルや文学研究者アラン・バジェスらの協同による領域横断研究が著しく進んだ。たとえば、2006年にドレフュス復権100周年を記念してフランス人権同盟が主催した国際学会、「ドレフュス派であること、過去と現在」(*Être dreyfusard, hier et aujourd'hui*) の開催などが記憶に新しい。陸軍士官学校、そしてパンテオンという象徴的な2つのモニュメントにおいて、ドレフュスとゾラの子孫を含む関係者が集い、事件の歴史的意義が再確認された。

それではまず、事件の流れを簡単に整理しておこう⁴。1894年9月末、フランス陸軍の情報局は、ドイツ大使館付き武官シュヴァルツコッペン⁵の執務室の屑籠から、対独協力者の存在を仄めかす紙片を入手する。「明細書」(*bordereau*) と呼ばれる文書の書き手とされ、10月15日にスパイ容疑で逮捕されたのが、アルザス系の帰化ユダヤ人であり、砲兵大尉のアルフレッド・ドレフュスであった。12月19日にパリの軍法会議で非公開裁判が行われ、22日に満場一致で有罪判決が下された。1895年1月5日、陸軍士官学校でドレフュスの名誉が剥奪され、2月には政治犯を収容する南米ギアナの「悪魔島」に流刑となる。日刊紙『プチ・ジュールナル』の一面は、「裏切り者」と題したサーベルを折られるドレフュス大尉のイラストで飾られたが、まだ世間の耳目を集めるには至



〔図2〕『プチ・ジュールナル』1895年1月13日号

らなかった〔図2〕。7月、陸軍情報局局長に着任したジョルジュ・ピカール少佐〔のち中

³ ジョルジュ・メリエス (Georges Méliès, 1861-1938)。リュミエール兄弟に触発されて1896年より映画製作を始め、マジシャンとしての経歴を活かしたスペクタクル性の強い作品を多数発表した。熱心なドレフュス派でもあり、1899年に事件を再構成した11本の連作『ドレフュス事件』を発表するが、公開当時は上映禁止処分などの迫害を受けた。

⁴ 事件の時系列については、とくに以下を参照されたい。アラン・バジェス『ドレフュス事件 真実と伝説』吉田典子・高橋愛訳、法政大学出版局、2021年。

佐に昇進」は、翌年3月にふと入手した「速達」(petit bleu) がきっかけで、有罪判決に疑念を抱く。半年かけて調査を進めたのち、筆跡鑑定人ベルティヨンの主張を根拠に下された判決は誤りで、真犯人は借金が嵩んで軍事機密を流したフェルディナン・エステラジー少佐だとつきとめる。しかし上層部に提出された報告書はもみ消され、ピカール中佐は不自然にも情報局長を解任、植民地に派遣された。

いっぽうドレフュスの家族は一貫して無罪を主張し続け、やがて弟のマチューとユダヤ人ジャーナリストのベルナール・ラザールを中心に「再審要求運動」が起こる。共和派の自然主義作家エミール・ゾラは、当初事件にさほど関心を示さなかった。だが1897年11月、上院議員のシュレル＝ケストネル、『オーロール』紙の編集長ジョルジュ・クレマンソーによって、軍部の陰謀を確信させる数々の証拠に接し、再審要求キャンペーンに身を投じる。1898年1月10日、軍法会議でエステラジー裁判が行われるが、翌日には満場一致で無罪となって釈放される。この不正に憤ったゾラは1898年1月13日、「私は告発する」を『オーロール』紙に発表、名指しで事件の関係者たちを非難し、出版法にあえて抵触することで、法廷において自らドレフュスの無実を訴える機会を作った。

「私は告発する」の反響は凄まじく、2月7日から23日にかけてセヌ県の重罪院にてゾラ裁判(Procès Zola)が行われ、ゾラは侮辱罪の最高刑である禁固一年の判決を受ける。7月にヴェルサイユ重罪院で有罪が確定すると、反ドレフュス派の脅迫に身の危険を覚えたゾラは、愛人のジャンヌ・ロズロと2人の子供を連れてイギリスに亡命した。しかし再審要求運動の中心人物たちには、諸外国から激励の手紙が送られ続けた。またその間には、文書偽造を告白したアンリ中佐の自殺やフェリックス・フォール大統領の死去など、事件の風向きが変わる出来事が続いた。1899年8月、ようやくレンヌ軍法会議でドレフュスの再審がなされる。判決はまたも有罪だったが、「情状酌量の余地あり」(circonstances atténuantes)として、エミール・ルーベ大統領より恩赦を受ける。そして1906年7月12日、ついに破棄院においてレンヌ軍事法廷の有罪判決が破棄され、ドレフュスは名誉を回復してピカールとともに陸軍に復帰する。1902年9月29日にゾラがパリの自宅で不慮の死を遂げてから、じつに4年が経っていた。

1. 2) 近代フランスにおけるユダヤ人の社会的統合

さて、時系列にしたがって事件を俯瞰すると、本人のまるで意図せぬ形で政治的に利用されたドレフュスの名は、メディアを通じて悪魔的なイメージにも悲劇的なイメージにも誇張され、一人歩きしていったことがわかる。しかし、その背景には解くべき謎がいくつも隠されている。なぜ当初非公開であった裁判が、のちには各媒体で報じられることとなり、再審要求運動には強い逆風が伴ったのか。ベル・エポックの繁栄を謳歌していた共和制期のフランスにおいて、一作家に過ぎないゾラが亡命せざるを得なかったほど強大な敵意の正体は何

だったのか。そもそも当時の造語である「ドレフュス派」、「反ドレフュス派」という派閥の内側には、どのような社会的立場の者たちが含まれていたのだろうか。

11世紀末の第1回十字軍以来、中世の西ヨーロッパでユダヤ人に対する迫害が繰り返されてきたことは周知の通りだ。キリスト教文化圏においてユダヤ人のコミュニティはゲットーに隔離され、ユダヤ人男性を狡猾で残忍な人物類型として描く民話が流布していく。14世紀に編まれたチョーサーの『カンタベリ物語』には、信心深い幼子がゲットーで惨殺され、その亡骸が死してなお聖母マリアを賛美し続けたという、「尼僧院長の話」が挿入されている。シェイクスピアの『ヴェニスの商人』（1596-97）第3幕第1場においては、恣意的に創られた「異教徒」や「高利貸し」といった虚像に反論するかのような、シャイロックの長広舌が振るわれる。

「俺たち同族をさげすみやがって、商売の邪魔はするし、友情にゃ水をさす、敵意にゃ油を注ぐ、いったいなんの理由があって、そうするんだ？ 俺がユダヤ人だからだ。ユダヤ人には眼がないってのか？ 手がないってのか？ いやさ、臓腑、五体、感覚、感情、そしてまた喜怒哀楽がないとでもいうのか？ 食物も同じなら、同じ刃物で傷がつく、罹る病気も一緒なら、治す療治も同じだ。冬は寒けりゃ、夏は暑い、どこがキリスト教徒らとちがうんだ？ 針についても、血は出ぬとでもいうのか？ くすぐられても笑わぬ、毒を持っても死なぬとでもいうのか？ ひどい目にあわされて、復讐するのが、なぜ悪い？ ほかんところがすべて一緒なら、これだって、なにも同じだろうじゃないのか⁵？」

だがシャイロックが告発したキリスト教社会におけるユダヤ人のタブー視は、啓蒙主義の世紀には少しずつ影を潜め、19世紀のロマン主義文学ではオリентへの夢想と混じって「美しきユダヤ娘」への憧憬も徐々に現れる。ウォルター・スコットの『アイヴァンホー』（1820）における清純なレベッカはその典型だろう。とはいえ、スペインのアンダルシアを舞台にしたメリメの『カルメン』（1845）では、語り手の「私」がロマの女カルメンと初めて出会う場面で、彼女の素性をアンダルシア人かムーア人かと推測したのち、「さすがにこう言うのは憚られた、ユダヤ人とは⁶」、とためらう描写がある。語り手の本能的な沈黙は、物語が進行する1830年のスペインにおいて、ユダヤ人がロマと同じく、「天国からもっとも遠い」社会のアウトサイダーと見なされていたことを示唆する。

しかし、19世紀前半のフランスは比較的ユダヤ人に寛容で、とくにパリではユダヤ人の

⁵ シェイクスピア『ヴェニスの商人』中野好夫訳、岩波文庫、1973年、87頁。一部改変。

⁶ Merimée, *Carmen*, Gallimard, coll. « Folio Classique », 2010, p. 33.

社会的統合が急速に進んでいた。フランス革命後の国民議会（1789-91）が、諸外国に先駆けてユダヤ人の「解放」と市民権の付与を宣言したからだ。第一帝政期（1804-14）には「ナポレオン法典」（1807）によってユダヤ人に居住と結婚の自由が保障され、七月王政期（1830-48）にはユダヤ人の法的地位もさらに向上する⁷。オノレ・ド・バルザックの『娼婦の栄光と悲惨』（1838）は、こうした世相の変化をよく表しており、ヒロインのエステルはユダヤ系オランダ人の両替商ゴブセックの私生児である。名前ですぐそれとわかるユダヤ系の出自は、かえって蠱惑的な魅力を彼女にまとうせ、「シビレエイ」の異名をとるほどパリ社交界の男たちを夢中にさせる。そのエステルを見初め結婚を熱望するのは、アルザス系改宗ユダヤ人の大銀行家ニュシンゲンである。訛りの強いフランス語で戯画的に描かれるものの、第一帝政期に貴族の称号を手に入れ、計画的な偽装倒産によって財を増やし権勢を拡げる剛腕の男爵は、明らかにロスチャイルド一族をモデルとしている。

18世紀後半にフランクフルトのユダヤ人ゲッターから宮廷まで上り詰めたマイアー・アマシェル・ロトシルト（1744-1812）は、ナポレオン戦争時に莫大な財を築いて一大金融業者となる。1822年にはハプスブルク家から男爵位と五本の矢を象った紋章を授けられたロスチャイルド一族は、ヨーロッパを網羅する情報ネットワークを武器に、国際政治にも影響力を及ぼした⁸。パリを任されたジェームス・ド・ロチルド（1792-1868）は、ナポレオン没落後もルイ・フィリップの七月王政、およびナポレオン三世の第二帝政と親密な関係を築き、銀行業と鉄道事業を発展させる。息子のアルフォンス・ド・ロチルド（1827-1905）は、普仏戦争下のパリ包囲時には市民の救済に奔走し、敗北後はプロイセンとの調停に貢献した。改宗ユダヤ人のロチルド一族は、政治的にはつねに共和主義に批判的な保守派の立場を貫き、そのいっぽうで文芸や芸術の庇護者としても活躍した。第三共和制下のパリでは、ほかにもモイズ・ド・カモンド（1860-1935）やアルベール・カーン（1860-1940）など、芸術愛好家として名高いユダヤ人銀行家たちが、サロンの社交生活においても強い存在感を放っていた。

ユダヤ人への市民権が保証された開放的な首都パリには、ヨーロッパ諸国からユダヤ系知識人・芸術家たちも絶えず流入していた。七月王政下の劇場では、ドイツ系ユダヤ人のジャコモ・マイアベーア（1791-1864）が《悪魔のロベール》（1831）、ジャック＝フロマンタル・アレヴィ（1799-1862）が《ユダヤの女》（1835）と、フランス様式のグランド・オペ

⁷ 近代フランスにおけるユダヤ人統合の歴史的経緯については、以下を参照されたい。有田英也「フランス「国民」の創生とユダヤ系フランス人アイデンティティの確立」、『成城文藝』第161号、成城大学文学部、1998年、196-179頁。

⁸ 1812年に没した初代ロトシルトは遺言で、西ヨーロッパの主要都市に興した金融事業を5人の息子に継承させた。長男のアムシェルがフランクフルト、次男のザロモンがウィーン、三男のネイサンがロンドン、四男のカールがナポリ、そして五男のジェームスがパリである。これが19世紀ヨーロッパの政治経済を支えたロスチャイルド財閥の礎となった。

ラで国際的な名声を得た。彼らの活躍を励みにドイツから移住したジャック・オッフエンバック（1819-80）もまた、第二帝政期に《地獄のオルフェ》（1858）や《美しきエレーヌ》（1864）などオペレッタの大ヒット作を矢継ぎ早に生み出す。ドレフュス事件が起きたベル・エポックのパリでは、美術商サミュエル・ビング（1838-1905）や女優サラ・ベルナール（1844-1923）が、やがてアール・ヌーヴォーとして花開く芸術潮流を牽引していた。富裕層に属する改宗ユダヤ人は、公的には統合された市民とみなされ、その二世ともなれば、ユダヤ人としての出自よりフランス人としてのアイデンティティに重きを置いて社会生活を営む者が多かった。そしてミュルーズの織物業者の家庭に生まれ、1871年にフランス国籍を取得した父を持つアルフレッド・ドレフュスもまた、愛国的なフランス人という自己認識に基づいて陸軍でのキャリアを形成していたのである。

2. 「名付け」による「反ユダヤ主義」の実体化

2. 1) メディアにおける「反ユダヤ主義」の萌芽

それでは、これほどユダヤ人統合が進んでいた 19 世紀のパリにおいて、なぜ反ユダヤ主義的風潮がドレフュス事件の展開を左右するほど高まったのだろうか。そもそも「反ユダヤ主義 antisémitisme」という言葉を創造したのは誰なのか、という問いを投げかけた最初のひとりであるアラン・パジェスは、この語が歴史あるものではなく、またドレフュス派のメディアによって発明されたものではないことを指摘している⁹。

古代ギリシャ語に由来する «anti-» という接頭辞は、匿名による誹謗中傷が常態化している現代社会でも、インターネット上では日常的かつ無造作に「アンチ」という一般名詞として使われている。特定の個人や団体に対して反意を持つ、また攻撃的な言動をとる者を指すことからわかる通り、この接頭辞はもともと名詞・形容詞に前置され、敵対的なニュアンスを与える¹⁰。ラルースの『19 世紀百科事典』（1866-76）では、「反対するもの、対立するもの」を指し、第一義として「（ある人物、作品、制度、思想への）反対・敵対」を表す¹¹。もっとも古い例には、新約聖書「ヨハネの第一の手紙」（2 章 18 節、2 章 22 節、4 章 3 節）で言及される「反キリスト antéchrist」がある。これは「イエスが救い主キリストで

⁹ 「語というものは、人間の精神がそれを我が物として、それに内実を与えるために、歴史のある時点で生まれるのである。」（アラン・パジェス、前掲書 82 頁）。

¹⁰ 類似の接頭辞には «contre-»（～に逆らって、抗して）があり、たとえば「カウンターアタック contre-attaque」、「カウンターカルチャー contre-culture」などがよく使われる。名詞に前置される場合は、ある大きな力に対する「反抗・反逆」のニュアンスが付与され、厳密には «anti-» と区別される。

¹¹ 「抗老化 antiâge」などの語も一般名詞化しているが、これは第二義の「対抗・予防」を示す接頭辞がついた結果であり、医学的用法である。

あることを否定し、民を惑わす者」を指し、ニーチェはキリスト教批判の著作に『反キリスト』(*Antéchrist*, 1889)と掲げた。修辞学の伝統においては、「アンチテーゼ *antithèse*」は、ある概念に対して反対の概念を並べる「対照法(対句法)」として、とくにフランスで広く教育・実践されてきた。しかしこの場合、対立しあう概念は並立されることによって互いを引き立たせ、けっして反目関係にあるわけではない。またヘーゲルからマルクスに至る弁証法においても、ある命題に対する「アンチテーゼ(反対命題)」は、肯定的な命題を認めた上での否定的主張であって、「サンテーズ(統合)」に至るまでのプロセスである。

しかし19世紀以降のメディアにおいては、既存のイデオロギーに接頭辞「*anti-*」をつけて反対の立場を表す新語を創ることが盛んになる。とくに両大戦期には、ある思想・教条への「反対・敵対」を示す複合語が増加し、「反教権主義 *anticléricalisme*」(1903)、「反独の、反独主義者 *antiallemand*」(1920)、「反資本主義 *anticapitalisme*」(1931)、「反ファシズム *antifascisme*」(1933)などが次々と辞書に立項されてゆく。すると、ある概念に対する「対照」ではなく「否定、敵対」のニュアンスが増幅され、イデオロギー闘争に用いることが容易となる。しかしそれらは必ずしも体系化された概念とはいえず、社会を覆う茫漠とした風潮に対する、多くの場合は主観的な態度を示すに過ぎない。いずれにせよ、ある名前や現象に「*anti-*」を接続する「名付け」の行為によって、元の語ではなく「*anti-*」のついた新語のほうが、逆説的に一般化されることはままあった。この奇妙な現象を、ドレフュス事件における「反ユダヤ主義 *antisémitisme*」や「反ドレフュス派 *antidreyfusard*」といった言葉の汎用化と結びつけることはけっして不自然なことではないだろう。

現代の『プチ・ロベール辞典』に立項されている「反ユダヤ主義 *antisémitisme*」は、第一に「ユダヤ人に対する敵意」(*hostilité contre les Juifs*)、さらに「ユダヤ人に向けられた人種差別主義」(*racisme dirigé contre les Juifs*)と定義され、狭義の宗教的態度を示す「反ユダヤ教 *antijudaïsme*」とは明確に区別される。フランスでの初出は1880年、しかも先に反ユダヤ主義的風潮が顕在化したドイツ語からの翻訳とされる。そして最初期の用例として引用されているのは、エミール・ゾラ、アナトール・フランス(1844-1924)、オクタヴ・ミルボー(1848-1917)の3名で、いずれもドレフュスの同時代人、かつ「反ドレフュス派」に否定的な立場にあった作家である。少し時代を遡るラルースの『19世紀百科事典』には、当然「*antisémitisme*」という語は確認できないが、「*sémitisme*」は立項されており、「ある民族、ある言語のユダヤ性¹²⁾」という簡単な定義が記されている。つまり「*sémitisme*」自体は、イデオロギーではなく民族性を指し示すきわめて用例の少ない語であったが、「*anti-*」という接頭辞の付加によって、19世紀末のフランスで鮮明になった

¹²⁾ « Caractère sémitique : Le sémitisme d'un peuple, d'une langue. » Pierre Larousse, *Grand dictionnaire universel du XIX^e siècle*, Administration du Grand dictionnaire universel, t. XIV, 1875, p. 525.

「ユダヤ民族」への敵対的態度という現象が実体化したのである。

19世紀前半のパリで改宗ユダヤ人が活躍する陰で、反ユダヤ主義的な風潮が芽生える兆しは既にあった。隣国のドイツでは、ブルーノ・バウアーの『ユダヤ人問題』（1843）や、それに反駁するカール・マルクスの『ユダヤ人問題に寄せて』（1844）によって、ユダヤ教とユダヤ民族に対する思想的攻撃が始まっていた。1850年にはリヒルト・ワーグナーがまず変名で、そして69年には実名で、「音楽におけるユダヤ性」を発表し、マイヤベーアやメンデルスゾーンら、国際的に評価されるユダヤ人音楽家を批判した。これらドイツ語の著作が、フランスの読者層にただちに影響を与えたとは考えづらいものの、一部の改宗ユダヤ人や芸術愛好家にとってワーグナーの態度が混乱と当惑を招いたことは確かだ。そしてフランスでも政情が不安定になるたびに、地方では民衆の不満のはけ口としてユダヤ人への迫害が散発していた。とくに1848年の二月革命時には、アルザス地方で混乱に乗じた大規模なユダヤ人への暴動が発生する。

前述の通り、1851年のクーデターによって樹立したナポレオン三世の第二帝政は、ユダヤ系の資本家によって下支えされていた。しかしその反動から、普仏戦争敗北によるアルザス・ロレーヌ割譲によって、1870～80年代にはアルザス系ユダヤ人への反感が高まった。第三共和制の政治基盤は不安定で、王党派や教権主義者による議会分裂の危機を孕んでいた。1877年には、パリ＝コミューンを鎮圧したマク＝マオン大統領が、「5月16日の危機」と呼ばれる議会クーデター計画を企てて失敗した。1881年には穏健共和派のレオン・ガンベッタ内閣が誕生するが翌年に事故死、89年にかけては反共和主義勢力を束ねたブルーランジェ將軍のクーデター未遂事件が起こる。さらに決定的だったのは、1892年に起きた共和制を揺るがす大スキャンダル、500人以上の政治家が告訴されたパナマ運河疑獄である。南米パナマの運河建設計画をめぐる収賄疑惑の中心には、政治家のジャック・ド・レーナック男爵（1840-1892）、銀行家のコルネリウス・エルツ（1845-1898）と、2人のドイツ系ユダヤ人がいた。急進派のジョルジュ・クレマンソーも、エルツとのかかわりを疑われ一時的に政界を退く。右派への工作が発覚し、自殺したレーナックは、のちにゾラの小説『パリ』（1898）において、保守派の議員ヴェイヤール男爵のモデルとなる。このレーナックが、エドゥアール・ドリュモンが編集長を務める愛国主義新聞『リーブル・パロール』に接触したことから、パナマ運河疑獄は大衆の知るところとなった。

ドリュモンは、1886年に発表された『ユダヤのフランス¹³』（*La France juive*）の著者として知られる。当初は盲目的愛国者による大著として、複数の出版社の間でたらい回しにされ、最後にマルボン・フラマリオン書店に初版五千部を自費出版という形で引き取られたと

¹³ 原題の *La France juive* には、『ユダヤ人のフランス』、『ユダヤ的フランス』、『ユダヤのフランス』等、複数の訳語が定着しているが、本論では『ユダヤのフランス』という記述で統一する。

いう¹⁴。しかし『ユダヤのフランス』は、反ユダヤ主義的風潮が高まる世相との相乗効果によって、わずか2年で140刷を重ねるベストセラーとなり、他国でも多数の亜流を生んだ。ドリュモンの著書に、「antisémitisme」という語は現れないが、代わりに多数の政財界人を名指して「メディアの支配者」と表現し、読者に潜在する反ユダヤ主義的感情を巧みに焚きつけた。1892年にドリュモンは『リーブル・パロール』紙を創刊するが、もっとも早くドレフュス事件を報じたのはこの新聞であった。『リーブル・パロール』に共鳴する読者は、あくまでも「フランスのフランス人」(un Français de France)であると自認しており、その中にはしばしば保守派の富裕な改宗ユダヤ人がいた。「反ドレフュス派」の知識人・芸術家には、ゾラと敵対関係にあった作家モーリス・バレス、のちに国粹主義組織「アクション・フランセーズ」に合流するレオン・ドーデのほか、ゾラの旧友である画家ポール・セザンヌも含まれる。

このような社会的風潮に警鐘を鳴らし、はっきり「反ユダヤ主義」と命名したのは、1894年に『反ユダヤ主義、その歴史と原因¹⁵』(*L'Antisémitisme, son histoire et ses causes*)を発表したユダヤ人ジャーナリスト、ベルナール・ラザールである。1895年に『リーブル・パロール』がドレフュス事件を大々的に報じて以来、ドリュモンとラザールはメディア上で激論を繰り返した。1896年11月にラザールは、『誤審 ドレフュス事件の真実』(*Une erreur judiciaire. La vérité sur l'affaire Dreyfus*)と題した小冊子をブリュッセルで出版し、ドレフュス再審要求運動への協力を期待してゾラにも直接手渡した。共和派の『ヴォルテール』紙に発表した一連のドレフュス擁護の記事は、翌年に『反ユダヤ主義に抗して¹⁶』(*Contre l'antisémitisme*)と題して刊行される。しかし、過熱するばかりの反ユダヤ主義と、ユダヤ人たちの受動的な忍従の姿勢に失望したラザールは、やがてユダヤ民族の国家建設を目指すシオニズム運動の提唱者となった。

2. 2) ゾラの『金銭』から「ユダヤ人のために」まで

ベルナール・ラザールの『反ユダヤ主義に抗して』には、ドリュモンと対置される形で、共和主義者エミール・ゾラの名が再三現れる。そのゾラは、ドレフュス再審要求運動に加わる前に、世紀末の反ユダヤ主義的風潮を予言する一冊の小説を発表していた。1891年の『金

¹⁴ ドリュモンを世に出した「最後の授業」の作者アルフォンス・ドーデの息子レオンは、のちにラザールやゾラと激しく対立した。「当初はまったく売れなかったが、ドーデの口利きで『フィガロ』紙に簡単な紹介記事が載った途端に火が点き、年内に6万5千部を売りまくった。[...] いずれにせよ、この出版は、出版社自体のイデオロギー傾向を反映したものではないさかもなかった。[...] それはこの時期のほかの出版社も大同小異であって、たとえば、フランスにおける反ユダヤ主義が頂点に達したドレフュス事件に際して、反・反ユダヤ主義を鮮明にしたゾラと心中を覚悟した出版社ファスケル——シャルパンティエの後継者——とて例外ではなかった。」(石橋正孝・倉方健作『あらゆる文士は娼婦である 19世紀フランスの出版人と作家たち』、白水社、2016年、141頁。)

¹⁵ Bernard Lazare, *L'Antisémitisme. Son histoire et ses causes*, Léon Chailley, 1894.

¹⁶ Bernard Lazare, *Contre l'Antisémitisme. Histoire d'une polémique*, P.-V. Stock, 1896.

『*L'Argent*』は、ゾラのライフワークである『ルーゴン＝マッカール叢書』（1871-93）第18巻に当たる。タイトル通り本作は、パリの「証券取引所 Bourse」を舞台に、主人公アリスティッド・サッカールの金融バブルに乗った大成功とあっけない破綻を通して、資本主義経済の熾烈な競争を描いている。そしてサッカールの強力なライバルとなる徹底した合理主義の大銀行家グンデルマンは、準備資料において「型通りのフランクフルト系ユダヤ人¹⁷」と設定されている。明らかにモデルはロスチャイルド一族、より具体的には第二帝政末期までパリの金融界に君臨したジェームス・ド・ロチルド男爵である。

『ルーゴン＝マッカール叢書』は第二帝政期（1852-70）を描いた連作であり、『金銭』におけるサッカールの思想や行動は、史実においてロチルド男爵のライバルであった、ユダヤ系フランス人の銀行家ペレール兄弟の足跡をなぞっている¹⁸。しかし執筆にあたって直接の着想源となったのは、1882年に起こったカトリック系で反ユダヤ主義的な「ユニオン・ジェネラル銀行」の破綻であった¹⁹。つまり本作は第二帝政を題材にした歴史小説の皮を纏いながら、第三共和制の時事問題を描いた社会小説でもあるのだ。そのことは、第1作『ルーゴン家の運命』（1871）からの重要な再登場人物、サッカールの兄で内務大臣まで上り詰めたウジェーヌ・ルーゴンの言動から明らかとなる。

真相とはいえば、ルーゴンは一族の墮落した輩と絶縁しようと断固決意していた。怪しい事件で絶えず自分を脅かし、厄介者と化した弟を、無理にでも切り捨てようと目論んだ。[...] カトリックからは喝采されても、伸長する第三勢力から激しく非難されているルーゴンは、リベラルなボナパルト派を味方につけた第三勢力に何らかの手当をしなければ、権力を失いそうだと予感していた。[...] ユダヤ人が証券取引所の王となったのだ。世界を支配する教皇至上主義者のカトリック連中より、民衆に認められた金銭の王国を支配するユダヤ人のほうがましだ²⁰！

¹⁷ Notes par Henri Mitterand pour *L'Argent* d'Émile Zola, *Les Rougon-Macquart*, Armand Lanoux (éd.), Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », t. V, 1967, p. 1266. 以下、『ルーゴン＝マッカール叢書』からの引用はこの版を典拠とし、*RM* と略記。

¹⁸ エミール・ペレール (Émile Pereire, 1800-73) とイザーク・ペレール (Isaac Pereire, 1806-80) は、七月王政期に鉄道建設で成功を収め、1852年にサン＝シモン主義にもとづく「クレディ・モビリエ銀行」を設立した。ペレール兄弟は金融業と鉄道事業で東欧、ロシアにまで進出したが、ロスチャイルド商会との国際競争に敗れ1868年に銀行を閉鎖する。自身もサン＝シモン主義に傾倒していたゾラは、サッカールのユニヴァーサル銀行の経営理念に、「クレディ・モビリエ」のそれを反映させている。

¹⁹ 創作に際してつねに文献調査を重視したゾラが、『金銭』執筆のためにメモをとった資料の多くは、1880年代に出版された金融業や社会主義に関する文献である。ドリュモン『ユダヤのフランス』からの引用は、直接準備草稿に現れないものの、プロットや人物造形に影響を与えていることは疑いようがないだろう。Cf. Notes par Henri Mitterand pour *L'Argent*, *ibid.*, p. 1283-1285.

²⁰ Émile Zola, *L'Argent*, p. 338.

第2作『獲物の分け前』(1873)、第6作『ウジェーヌ・ルーゴン閣下』(1876)でのルーゴンは、「純粋な権力」を求める野心家であった。1851年にはボナパルト派、ついで1850年代には王党派とカトリックを抱きこみ、そして1860年代初頭に自由主義帝政を称揚して政権の中枢でのし上がる様が描かれてきた。ところが『金銭』において初めて、ルーゴンはリベラルな第三勢力に脅かされ、政治的選択としてカトリックではなくユダヤ系資本家に接近することを望んでいる。ジェームス・ド・ロチルドもベレール兄弟も、ともにユダヤ系で帝政初期からナポレオン三世と密な関係にあったのだから、この対立構図は第二帝政期のものとするにはかなり不自然だ。つまり本作でのウジェーヌ・ルーゴンは、当初の人物設定からは大きく逸脱し、ユニオン・ジェネラル銀行が破綻した当時の、保守派の政治家に近い行動をとっていることになる。

いっぽう『金銭』の終盤においてグンデルマンに敗北したサッカールは、投機師として登場した『獲物の分け前』にはまったく表れなかった反ユダヤ主義的な言動をとる。このとき彼が感情を露わにする相手は、ユニヴァーサル銀行の経営にサン＝シモン主義の傾向を与えた社会主義者ジジスモン・アムランの姉であり、サッカールとプラトニックな信頼関係で結ばれたカロリーヌ夫人である。

サッカールは、血のなかに流れる嫌悪感を吐きだした。この何百年、国から国へとさまよい歩き、寄生虫のように人々から血を搾りとり、つばをはきかけられようと叩かれようと、いつの日にか金の力で世界を征服しようとしている、スパイと高利貸しのこの民族に、あらためて告発の言葉を投げつけた。そして、とりわけグンデルマンに激しい敵意をぶつけた。[…]

「俺は何年も前から屋根の上から躍起になってみんなに大声でそれを言っているが、誰も聞いちゃいないみたいだ。[…] そうさ、ユダヤ人を毛嫌いするのは俺の身体に染みついたものなんだ。ずっと深く、それは俺という人間の根っこのところにあるんだ！」

「変わったことをいうのねえ」

広い知識を持ち、あらゆる者に対して寛容なカロリーヌ夫人は穏やかに呟いた。

「私にとっては、ユダヤ人だってほかの人たちと同じだわ。あの人たちが違っているというのは、ほかの人たちがそうしたからだわ」

サッカールはそんな言葉に耳も貸さず、さらに激しく言葉を継いだ。「帝国はもういい加減グンデルマンに身を売っているんだ。[…] 考えたことがあるかい。グンデルマンが商売を続けられるようにユニヴァーサル銀行を絞め殺したってことを！ 力を持ちすぎたカトリック系の銀行は、社会の危機として叩き潰される、最後にユダヤ人たちを勝たせるためにね。でも今度はフランス人が喰われるのさ、そのうち

にな²¹！」

読者になんの予備知識もなければ、7年後に「私は告発する」を著すゾラ思想と矛盾するサッカールの言動は、当惑と混乱をもたらすだろう。しかし兄ウジェーヌと同様、弟アリストテッドもまた、第二帝政期のバブルに乗じて成り上がる投機家ではなく、第三共和政期の愛国主義的な資本家として造形し直されている。その証拠に、「今度はフランス人が喰われる」と吐き出される憎しみは、1880年代以降のメディアに溢れていた、ドリュモンの『ユダヤのフランス』を始めとする右派の言説を焼き直したものだ。『金銭』執筆時のゾラ自身はむしろ社会主義思想への傾倒を強めており、こうした反ユダヤ主義的感情への当惑を、中立的な人道主義者カロリーヌ夫人に代弁させている²²。

『金銭』ではからずも示唆された政治家とユダヤ系資本の癒着は、翌年のパナマ運河疑獄で現実のものとなった。1893年の『ルーゴン＝マッカール叢書』完結後、そしてドリュモンとラザールの論争が激化した1890年代半ばから、以前のゾラがさほど関心を払わなかった「反ユダヤ主義」問題は、頻繁にその言説に現れるようになる。1896年5月16日、『フィガロ』紙に掲載された「ユダヤ人のために *Pour les Juifs*」は、「反ユダヤ主義」の危うさに警鐘を鳴らしたテキストであり、「私は告発する」の伏線でもある。

反ユダヤ主義は、それが現実の影響力を行使しているような国々にあっても、一政党の武器、あるいは深刻な経済状況の反映以上の意味をもつものではない。しかし、一部の人々が何といてわれわれにそう信じ込ませようと躍起になろうとも、ユダヤ人が金銭という権力の絶対的な主として振る舞っているなどとは決していえないこのフランスにおいて、反ユダヤ主義は、民衆の内部にまったく根をもたない空中楼阁である²³。

ゾラは明言しないが、当時すでに反ユダヤ主義が現実的影響力を及ぼしていたのは、隣国ドイツである。そしてフランスでの反ユダヤ主義は、対独復讐感情と結びついて増幅されたが、ゾラはそれを「空中楼阁 *air*」だと喝破する。ドリュモンの『リーブル・パロール』紙が日々拡散する過激な論調を支持するのは「一部の人々」——現代的な表現をすれば「アンチ」——に過ぎないと断言し、サイレント・マジョリティである「民衆 *peuple*」に呼びか

²¹ エミール・ゾラ『金』、野村正人訳、藤原書店、2003年、532-533頁。

²² Cf. Alain Pagès, « Zola face à l'antisémitisme. De la 'question juive' à la question de l'argent », *Les Cahiers naturalistes*, n° 78, 2004, p. 103-115.

²³ エミール・ゾラ「ユダヤ人のために」、菅野賢治訳『時代を読む — 1870-1900』、小倉孝誠・菅野賢治編、藤原書店、2002年、239-240頁。

けているのだ。ではゾラは、共和国の「民衆」の内に一体何を見出していたのだろうか。

3. 喚起される「共和国」の集団的記憶

3-1) 「群衆」の行軍を描いた叢書作品

これまで試みてきたように、事件の複雑な背景を解きほぐすと、ドレフュスの名誉回復はゾラー人の功績によるものではなく、ベルナール・ラザールが先鞭をつけた「反ユダヤ主義」への異議申し立て、シュレル＝ケストネルの政治的支援やジョルジュ・クレマンソーのメディア戦略など、ドレフュス派の弛まぬ共闘によって成し遂げられたことがわかる。また、アラン・パジェスや稲葉三千男は、ドレフュス再審要求キャンペーンでゾラが展開した一連のテキストを分析し、ラザールの文体の影響を指摘している²⁴。とはいえ、ゾラが『ルーゴン＝マッカール叢書』執筆を通じて構築した文学世界と、世紀末のドレフュス事件をめぐる諸問題が接続していなければ、『オーロール』紙の一面を飾った「私は告発する」は、事件の転回点となるあの爆発力を持ち得なかっただろう。

ゾラは1860年代からジャーナリストとして数々の媒体で批評記事を手がけ、1870年代以降は『ルーゴン＝マッカール叢書』の著者として、文壇や世間からの非難を浴びながら活動した。第二帝政下の社会が潜り抜けた数々の政治的変動を、シリーズを通して描く過程で、自然主義作家ゾラが掘り起こし発展させたのが、「群衆 *foule*」という主題である。たとえば叢書第1巻『ルーゴン家の運命』（1871）は、もっとも率直にゾラの「民衆」観を表した作品だ。第二帝政の起点となる、ルイ＝ナポレオン・ボナパルト大統領による1851年12月8日のクーデターをめぐる物語は、1848年の二月革命によって樹立した第二共和政のあっけない終焉をも描く。共和制への裏切りに抗議する民衆は、あり合わせの武器を手に行軍を編成し、『ラ・マルセイエーズ』を歌いながら南仏の平野を縦断する。

ミエットは足もとまで隠す大きな緋色のマントをまとい、白く輝く月光のもとに姿を現した。フードはシニヨンにひっかけられ、フリジア帽〔フランス革命のときに共和派がかぶった赤い縁なし帽〕をかぶったようだった。彼女は託された旗竿をしっかりと胸に押しあて、血で染めたかのような隊旗を後ろになびかせ、すっと佇んだ。縮れた髪の陰に潤んだ瞳を見開き、唇には軽い笑みを浮かべ、紅潮したあどけない顔には空へと羽ばたくような誇りに満ちた活気が漲っていた。彼女はまるで自由の女神だった²⁵。

²⁴ 稲葉三千男『ドレフュス事件とエミール・ゾラ 1897年』、創風社、1996年。

²⁵ Émile Zola, *La Fortune des Rougon*, RM, t. I, 1960, p. 31.

共和派の赤い旗を掲げる勇敢な少女ミエットがまとうのは、「ペリース pelisse」と呼ばれる毛皮つきのマントだが、その色もまた革命旗と同じ赤である。「フリジア帽」のようなフードによって1789年のフランス革命が、そして「自由の女神 la vierge Liberté」の比喩によって、ドラクロワが描いた1830年の七月革命の記憶が喚起される。だが、蜂起民の行軍は政府軍と衝突して壊走し、ミエットもあえなく銃弾に倒れる。政府による共和主義者の虐殺は、『ルーゴン家の運命』刊行時の読者には、パリ＝コミューンの動乱、とくに1871年5月に起きた「血の一週間」の惨劇をまざまざと想起させただろう。かくして『ルーゴン＝マッカール叢書』においては、巨大な権力に抗う民衆の行軍、そのエネルギーに内在される共和主義精神が、ひとつの重要なライトモチーフとなる。

社会主義運動を正面から描いた代表作『ジェルミナル』（1885）には、ゾラ作品における群衆描写の白眉となる場面がある。本作の時間軸は第一次インターナショナルが結成された1860年代に置かれるが、実際は1884年にフランス北部の炭鉱町アンザンで起きたストライキに取材している。『金銭』でも反復される「過去」と「現在」の二重写しという構図によって、資本家の搾取に抵抗してストライキを行う炭坑夫たちの行軍は、1880年代のフランスで進行する資本主義競争のひずみを象徴するのだ。

続いて男たちがころがるように現れた。2,000人の猛り狂った少年労働者や採炭人、修繕人たちの寄せ集めだった。色あせた半ズボンも破れた毛糸のチョッキも、土色ただ一色にとけこんで見分けがつかず、きっちりと肩を寄せ、混じり合うただひとつの塊となって突き進んできた。彼らの目はぎらぎらと燃えていた。ただ《ラ・マルセイエーズ》を歌う真っ黒な口の穴だけが見えたが、そのフレーズは固い地面を踏みつける木靴の響きと混乱したうなり声にかき消された。人々の頭上に林立する鉄棒の間を、まっすぐに掲げられた斧が横切った。まるでストライキ団の軍旗のような一本の斧は、澄みわたる空にギロチンの刃のように鋭い面を光らせた。
[...]

大きな叫びが湧きおこり、《ラ・マルセイエーズ》の歌声を圧倒した。

「パンをよこせ！ パンをよこせ！ パンをよこせ²⁶！」

ギロチンのような斧を閃かせ、《ラ・マルセイエーズ》を歌いながら突き進むストライキ団は、見る者に宿命的な「革命の赤い幻²⁷」を呼び覚まし、明らかに『ルーゴン家の運命』で

²⁶ Émile Zola, *Germinal*, RM, t. III, 1964, p. 1436-1437.

²⁷ *Ibid.*, p. 1436.

ミエットが導いた蜂起民の行軍と呼応している。しかし『ジェルミナル』においては、リーダーのエティエンヌにも制御不能な、狼のように飢えた民衆の暴力性もまたはっきりと描かれる。怒りに燃える女たちは「裏切り者を倒せ！」(« À bas le traître! »)と叫びながら、ついに自分たちを辱めてきた雑貨店の店主メグラを惨殺し、その性器を切り落として高々と掲げるのだ。1789年の10月にヴェルサイユ宮殿を襲った「女たちの行軍」を想起させる挿話だが、この「裏切り者を倒せ！」という文句は、のちにドレフュス事件において反ドレフュス派のメディアが掲げたスローガンでもあった。

つまりゾラは第三共和制期の「群衆」の内に、理想化された共和主義精神というよりも、得体の知れない暴力的なエネルギーを見出していたのである。彼らはたやすく非科学的な迷信や流言飛語に惑わされ、結果として敗北の定められた戦争にさえ突き進む。叢書第9巻『ナナ』(1880)の終章では、美貌の高級娼婦ナナが天然痘で変わり果てた姿を晒す死の床の静けさと、普仏戦争前夜のパリを行進する、高揚感に一体化した群衆の狂騒が鮮やかに対比されている。

—— ベルリンへ！ ベルリンへ！ ベルリンへ！ [...]

人の群れが闇のなかに長く延び、まるで夜に紛れて屠殺場へひかれてゆく羊の群れのように白く波打っていた。渦巻いて流れるこの混乱した群衆、めくるめくばかりの群衆は、まさに来たらんとする殺戮の痛ましさと恐ろしさを発散していた。彼らは熱狂し、その激情に陶醉してかすれた叫び声をあげて、地平線の真っ黒い壁の彼方にある、未知なるものに向かって打ちかかろうとしていた。

—— ベルリンへ！ ベルリンへ！ ベルリンへ²⁸！

『ナナ』の刊行は普仏戦争敗北の10年後だが、当時の社会には対独復讐感情がくすぶり、ドリュモンの『ユダヤのフランス』を準備する国粋主義的な風潮が顕在化しつつあった。もはや「群衆」は、権力に抗って革命を志す「民衆」ではなく、ほとんど権力の意のままに操られる暴徒と化している。この印象的な『ナナ』の結末と呼応するのは、戦場へと向かう兵士たちを運ぶ列車の疾走で幕を閉じる、第17巻『獣人』(1890)の終行である。

機関車はいまや全速力で、ボルベックからモットヴィルへと延びる高原をひた走っていた。給水地点以外のどこにも停まらず、一気にパリまで駆け抜けるのだ。家畜のような人の群れをあふれんばかりに載せた18両の貨車は、ひっきりなしに唸り声を上げ、ひとつの巨大な塊となって闇に沈んだ平原を横切っていった。そして

²⁸ Émile Zola, *Nana*, *RM*, t. II, 1961, pp. 1480-1481.

大量虐殺へと向かっていく人々は、あらん限りの声を張り上げて歌っていた。高らかに響くどよめきは、車輪の音さえ圧倒するほどだった。[…]

機関車が途中で犠牲者を出したところでなんだというのか！ 飛び散る血潮も意に介さず、機関車はなおも未来へ向かって突き進むではないか！ 機関車は死の中に放たれた。眼も見えず耳も聞こえない野獣のように、機関士を失って闇の中をひたすら走っていた。積荷の肉と化した兵士たちは、すでに疲労困憊し、酔っ払ってただ歌いつづけていた²⁹。

かくも不吉な機械の疾走は、普仏戦争のみならず、やがて 20 世紀に訪れる大量殺戮を伴う 2 つの世界大戦さえ予告するかのようだ。『獣人』の終行で「死の中に放たれた」機関車は、西のル・アーヴルから東のパリに向かい、『ナナ』終行の残響を引き受けてベルリンを目指す。しかし満載された酔いどれ兵士たちは、やがて第 19 巻『壊滅』（1892）で描かれるスダンの包囲戦において、プロイセン軍に蹂躪され命を落とすだろう。『ルーゴン＝マッカール叢書』が巻を重ねるごとに、ゾラは作品の主題を同時代に求めるようになるが、そこで描写される群衆は、革命の精神を内在する民衆ではなく、世紀末の反ドレフュス派のイメージへと接近してゆく。匿名の群衆が孕む暴力性こそ、ベルナール・ラザールが「反ユダヤ主義」と名づけて抗戦を呼びかけ、ゾラがやがてその身に引き受ける敵意の正体であった。

3-2) スローガン「真実は前進する La Vérité en marche」

1897 年 11 月、ドレフュス派と反ドレフュス派、両陣営にとって事件は新たな局面を迎えた。匿名で身に迫る危機を警告されたエステラジーは、陸軍のペリユー將軍による内部工作にもかかわらず、メディアの攻勢に晒され始める。同月、ゾラはベルナール・ラザール、シュレル＝ケストネル、マチュー・ドレフュス、ピカールの弁護士ルイ・ルプロワ、ジョルジュ・クレマンソーらと会食を重ねていた。当初ゾラは、「事件と距離を置きたい、傷口はあまりに化膿している³⁰」と、再審要求運動への合流をためらっていた。しかし、直接目にした証拠資料によってドレフュスの冤罪を確信すると、わずか半月で 3 本の記事を『フィガロ』紙に発表する。11 月 25 日の「シュレル＝ケストネル氏 M. Scheurer-Kestner」、12 月 1 日の「同盟 Le syndicat」、そして 12 月 5 日の「調書 Procès-verbal」である。これらの記事は、表沙汰にならぬよう軍部が圧力をかけてきた事件の経緯を、読者に詳らかにする効果があった。

しかしゾラと長いつき合いの『フィガロ』紙さえも、12 月 18 日に再審要求キャンペーン

²⁹ Émile Zola, *La Bête humaine*, RM, t. IV, 1966, p. 1330-1331.

³⁰ Lettre d'Émile Zola à Alexandrine Zola, *L'Affaire Dreyfus*. « J'Accuse...! » et autres textes, textes présentés et commentés par Henri Mitterand, Le Livre de Poche, coll. « Classiques », 2010, p. 17.

からの撤退を決める。そこでゾラは、ドレフュス派に与するという英断を下したシャルパンティエ-ファスケル社より、1897年12月14日に『青年への手紙』(*Lettre à la jeunesse*)、翌年1月7日に『フランスへの手紙』(*Lettre à la France*)を発表した。客観的な第三者として事件を記述した3本の記事とは異なり、より直接的に読者に訴える「公開書簡」の体裁をとった2つの小冊子は、「共和国大統領フェリックス・フォール氏への手紙」と副題を添えた「私は告発する」を準備する。

とくに『青年への手紙』は、「青年たちよ、どこへ行くのか。学生たちよ、どこに行くのだ。徒党を組んで街を駆け巡るとは…³¹？」という呼びかけから始まり、ラザールの「反ユダヤ主義」への抗戦という思想を踏襲している。そして、「徒党を組む *courir en bandes*」という表現は、『ルーゴン＝マッカール叢書』で繰り返し描かれた、猛り狂う群衆の残像をも喚起する。

反ユダヤ主義の青年たち、ではそんな人々が実在するというのか？ まっさらな頭脳、若々しい魂のバランスを、すでにこのばかげた毒が狂わせているというのか？ まもなく20世紀を迎えるというのに、なんとという懸念、なんとという悲哀！

人権宣言から100年が経ち、寛容と自由化の崇高な行為から100年が経つというのに、我々は中世の宗教戦争に逆戻りし、もっともおぞましく愚かな狂信主義へと退行するというのか³²！

事実ゾラの影響が及ぶ範囲を超えて、フランスの反ユダヤ主義デモは苛烈さを増しており、1898年1月のエステラジー裁判から翌月のゾラ裁判までに、植民地を含む諸都市で暴動が起こった。世紀末のロシアやポーランドで起きていたポグロムは、フランスに飛び火する兆しを見せ、社会的統合の完遂を信じていた改宗ユダヤ人たちは衝撃を受けた³³。1898年5月の立法院選挙の際には、ドレフュス派の候補者を中傷するため、「ユダヤ人の候補者 *Candidat pour les Juifs*」、「くたばれユダヤ人 *À bas les Juifs*」などと書かれたけばけばしいトラクトが、大量に街路に撒かれた³⁴。

多種多様の政治的・社会的立場の人々で形成される、「反ドレフュス派」と「反ユダヤ主義者」が渾然一体となった敵意に立ち向かうに当たり、ゾラは二項対立的な党派性を生み出し得る「*contre-*」や「*anti-*」という接頭辞を含む表現を避けた。それに代わって明確な意図のもとにゾラが掲げ、ドレフュスの名誉回復までの数年間にわたって影響を及ぼしたの

³¹ Émile Zola, « Lettre à la jeunesse », *ibid.*, p. 82.

³² *Ibid.*, p. 88.

³³ Pierre Birnbaum, *Le Moment antisémite. Un tour de la France en 1898*, Pluriel, 2015 [Fayard, 1998].

³⁴ ミシェル・ヴィノック『クレマンソー』大嶋厚訳、作品社、2023年、276頁。

が、「真実は前進する *La vérité en marche*」というスローガンである。クレマンソーは1898年1月13日の『オーロール』紙に「私は告発する」を掲載するに当たり、グロテスクな風刺画と扇情的なコピーを多用する反ユダヤ主義的な新聞とは対照的な戦略をとった。もっとも大きなフォントでタイトルを掲載し、一面丸ごとゾラのテキストだけを掲載したのである〔図3〕。「告発する *accuser*」という、直接目的語を不可欠とする他動詞の余白は感嘆符で閉じられ、サスペンスの効果を生む。しかし記事全文を読むと、証拠の捏造や隠ぺいに関わった陸軍関係者、筆跡鑑定人たち、司法関係者たちが、それぞれ名指しで告発の対象となっていることが判明する。

いっぽう「真実 *la Vérité*」という言葉は、「パリでは、抗えないほどに真実が歩き出しています³⁵」

など、テキストの要所で反復される。本来生命なき観念である「真実」は、目的語をとらない自動詞「歩く *marcher*」を伴って、寓意的な自律性をまとう。もっとも有名な「真実は前進し、何ものもその歩みを止めることはないであろう *La vérité en marche, et rien n'arrêtera*」というスローガンは、「私は告発する *J'accuse...*」というフレーズが8度繰り返される最終段落の直前に現れる。



〔図3〕エミール・ゾラ「私は告発する」、
『オーロール』紙、1898年1月
13日号

以前にもまして熱のこもった確信とともに、ここに繰り返します。真実は前進し、何ものもその歩みを止めることはないであろう、と。事件は、今日ようやく始まったばかりです。今日ようやく、人々の配置が明らかになったからです。つまり、一方に、光明がもたらされることを望まない罪人たち、他方に、光明がもたらされるためならば命さえ惜しまない正義の人々。[...] 真実というものは、それを地中深く埋め込もうとすればするほど、鬱憤し、爆発力を持つようになるものである。そして、それが実際爆発するとき、ありとあらゆるものを吹き飛ばさずにはおかないような力を蓄えるようになるものである³⁶。

³⁵ Émile Zola, « J'accuse...! », *L'Affaire Dreyfus*, op. cit., p. 133.

³⁶ エミール・ゾラ「私は告発する」菅野賢治訳、前掲書、267頁。

ゾラはテキストの核となる段落において、かつて『ジェルミナル』や『ナナ』において「群衆」として表現してきた、ひと塊に突き進む巨大なエネルギーのイメージを、「真実」という語に重ねた。そして最終段落における一連の告発を終えたのち、「私がここに成し遂げようとしている行為は、真実と正義の炸裂を早めるための革命的手段にほかならないのです³⁷」という一文が結論部に置かれる。「革命的手段 *un moyen révolutionnaire*」という表現によって、ゾラが共和主義の精神を呼び覚まそうとしたのは、むろん形式上の宛先人である共和国大統領フェリクス・フォールではなく、『オーロール』紙を手にとった30万人の読者に対してであった。

1898年2月7日にセヌ重罪裁判所で開廷した「ゾラ裁判」において、ゾラは「私は人生を著作に捧げてきた一介の自由な物書きであり、明日にでも本来の持ち場に戻り、中断された仕事にふたたび着手したいと願う一人の作家なのです³⁸」と表明した。自らの行動に何らの政治的意図も党派性もないという宣言は、2月22日の『オーロール』紙にその全文が掲載された。「私は告発する」からゾラ裁判に至る顛末は国際的にも注視され、ゾラは諸外国の読者から激励の手紙を数多く受けとった。「真実は前進する」というスローガンは、それを発したゾラ自身の制御下を離れ、自律的エネルギーと化して、翌年のドレフュス再審と恩赦、そして1906年の破棄院の判決へと結実することになる。

ふたたび事件のプロローグへ

1902年9月29日、ゾラはパリのブリュッセル通りのアパルトマンにおいて、煙突の不完全燃焼による一酸化炭素中毒で生命を落とした。公には事故死とされたが、いまなお真相は不明である。翌年モーリス・ル・ブロン——のちにゾラの娘ドゥニーズの伴侶となる——の提唱で、10月第1日曜日に「メダンの巡礼 *Pèlerinage de Médan*」が催されることになった。この巡礼は1世紀を超えていまでも途切れず続いており、作家が愛した庭で数々の講演や催し、国際的な交流が行われている。

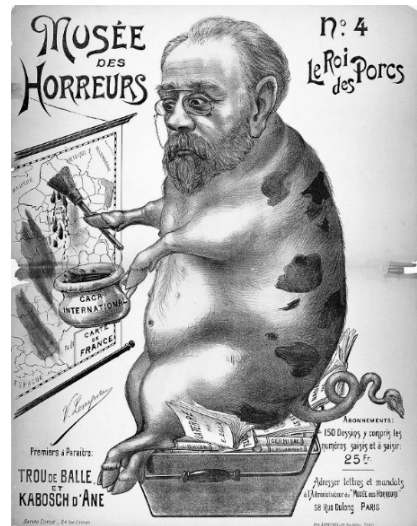
パリ近郊メダンのゾラ邸は、8年にわたる改修を経て、2021年10月28日にふたたびその扉を開いた。かつて盟友の出版業者ジョルジュ・シャルパンティエを迎えていた館の離れに、「ドレフュス記念館 *le Musée Dreyfus*」が開設されたのである。前日に行われた除幕式には、ドレフュスの孫シャルル・ドレフュスとゾラの孫マルティヌス・ル・ブロン＝ゾラ、そしてエマニュエル・マクロン大統領の3名が顔を揃えた。その入り口には、アルフレッ

³⁷ 同書、270頁。

³⁸ Émile Zola, « Déclaration au jury », *L’Affaire Dreyfus*, op. cit., pp. 169-161.

ド・ドレフュスとエミール・ゾラ、本来ならば交わらなかったはずの2人の人生行路と、彼らを取り巻く親族、友人、支持者、敵対者の織りなす複雑な関係が写真パネルとして展示されている。

2階には、ドレフュス事件の発端や司法の誤り、そして名誉回復までの経緯を物語る一次史料が展示されている。反ドレフュス派のカリカチュアやトラクト、デモの音声や映像が空間を満たし、ドレフュスやゾラを呑みこんだ敵意の苛烈さを物語る〔図4〕。冒頭で触れたカラン・ダッシュの諷刺画が象徴するように、権力と世論の間に生じた分断の深刻さやメディアの演じた役割を、来訪者はまざまざと追体験することになる。ドレフュス記念館が照らし出すのは、第三共和制から現代フランスまで根を張るライシテや表現の自由をめぐる諸問題、人種差別とデモクラシーとの闘いの長く錯綜した道程である。もはやメダンのゾラ邸は数ある文豪の記念館のひとつには留まらない。21世紀にドレフュスの名と結びつけられることによって、歴史と現代が接続する集合的な「記憶の場」へと変容したのである。



〔図4〕「豚の王」、『恐怖の博物館』
第4号、1899年11月

図版出典：

〔図1〕 <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Caran-d-ache-dreyfus-supper.jpg>

〔図2〕 <https://gallica.bnf.fr/ark:/12148/bpt6k7161044>

〔図3〕 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:J%27accuse_-_Gallica_-_page_2.png

〔図4〕 https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mus%C3%A9_des_Horreurs_4.jpg